#### 故郷を愛した民法学者

#### 我 妻 榮 先生



我妻榮記念館開館20周年記念事業実行委員会

# 我 妻 榮 先生



### まえがき

太博士、昭和三十九年受賞の民法学者 我妻榮 博士、平成十六年受賞の日本画家 福王寺法林だはくし しょうゎ ねんじゅしょう みんぽうがくしゃ わかつまざかえはくし くいせい ねんじゅしょう にほんがか ふくちりじ ほうりん 米沢市の出身者に三名の文化勲 章 受 章 者がいます。 昭 和十八年受 賞 の建築学者 伊東 忠は都でかし、こうでんしゃ、さんめい、ぶんかくんじょうじゅしょうしゃ

画伯です。

研究し、その保存に努められました。 伊東 忠 太博士が設計した主な建築物には 京 都の平安神宮、東京の明治神宮や築地本願寺があいとうちょう たまくし せっけい かき けんちくぶつ しょうじょく こうきょう めいじんぐう つきじ ほんがんじ

法」をまとめられ、学界や裁判に大きな影響を与え長く通説とされました。さらに、憲法改正語。 我妻 榮 博士は、生活に身近な財産や家族など幅広い民法の全分野を統一した考えで「我妻民就でまざかだけく」 せいかっ みょが ざいぎん かぞく はばひろ ずんぼう ぜんぶんや とういっ かんが おっこまみん

に伴う家族法改正の立案者の一人です。ともなったそくほうかいせい、いつあんしゃ、ひとり 福王寺法林画伯は、後年ヒマラヤを題材にした作品が多く、ヒマラヤの画家と呼ばれました。(ママホダロートサックムが サルト ) こうがん

米澤新聞本社三階に福王寺法林記念館が開設されています。よれぞれによれています。よれぞれによるほという。

に知って欲しいと思い、我妻 榮 記念館開館二十 周 年記念事 業 としてこの冊子を作りました。 ここでは、三名の中の一人で、故郷を愛し、故郷に尽くされた我妻 榮 先生を 小 学生の皆さん

### もくじ

### まえがき

我があっ	六	五	兀	Ξ	_	_
我妻榮略年譜	故郷への想い イ ターマルター タャャ	民法のバイブル	立法の指導者として 09っぽう しどうしゃ	四枚の絵はがき (兄妹愛) こ	相馬市までの無銭徒歩旅行 こそうまし	品行乙と赤井運次郎先生
16	14	12	10	8	6	4



## 品行乙と赤井運次郎先生

念館所在地)で生れました。

「おいっていた」で生れました。

「おいっていた」では、米沢市鉄砲屋町(現中央三丁目・我妻祭記れ、とがつついた」においてつぼうでまり、げんちゅうおうさんちょうめ、かがつまさかえ まれん しがつついたち よねざわしてっぽうでます げんちゅうおうさんちょうめ、かがつまさかえ まれんせい かがつままた じろう ちょうなん めいじ ねん 一八九七世んせい かがつままた じろう ちょうなん めいじ ねん 一八九七世んせい おがつままた じろう ちょうなん かんこう とうがっこう でんさい 我妻榮 は、米沢 中学校(現米沢興 譲館高等学校)の英語れかのもまかえ よねざわちゅうがっこう げんよねざわこうじょうかんこうとうがっこう えいこれかいつまさかえ よねざわちゅうがっこう げんよねざわこうじょうかんこうとうがっこう えいこ

中を、あっちへ行って教えたり、こっちへ来て教えたりじっと していないので、よく叱られて立たされました。慥の科目が甲 一学は、小学時代、人に教えるのが好きで、授業中教室のまた。 じょうがく じだい ひと おし

予習でよく判っていて自分が教えたくてちょろちょろ騒ぐのょう。 れから後、赤井先生は榮に分からない子に教えるように命じられから後、赤い世代は、『かぶ』と にした」と話され、お母さんは非常に喜ばれたそうです。そ りました。赤井先生は、お母さんに「新しく教わる所はすでに (優) なのに、品行(行動)だけは乙(良)でした。 しょう じょくり こうどう こうどう 四年生の時に赤井運次郎先生が受持になって、品行が甲になょれんせいとき、かいうんじろうせんせい うけもち 榮は見事にその役を果たしました。



の家を訪れ、 くなるまで続けました。 湯河原の別荘で作ったミカンができると一番先に先生に届りがなっています。 また自分の本を差し上げるということを、赤井先生が亡 旅行に出れば旅先からその土地の菓子や名物を送ります。

昭和三十九年、我妻榮は、民法学界の発展に尽くした長年とようや 2米沢名誉市民の称号を贈られました。

章 受章の記念写真を差し上げて感謝の気持ちを述べました。 そらく、家族を除いては、先生が一番喜んでくださると存じ めてくださった恩師です。鳩山先生は早く亡くなられ、榮は、 ます。それを思いますと、この上もない喜びです」と、文化勲派が 宅を訪ねて、「文化勲章をいただいたのも先生のお蔭です。おたく、たず して研究方法を教えられ、東大で研究者の道を進むことを勧す。 けんきゅうほう ほう すす 鳩山秀夫先生は、榮が学んだ東京 大学法学部の指導 教 授とはとやまかで おせんせい こうかえ まな こくうきょうだいがくほうがく ぶ こしどうきょうじゅ 私の今日在る恩を受けた先生」と述べています。

未亡人へ旅行先からの名産や本を送り続けました。



# 一 相馬市までの無銭徒歩旅行

は、 で、後輩から四 秀 才の一人に数えられ、語り草になるで、後輩から四 秀 才の一人に数えられ、語り草になる年間一番を通し五年生の全科目の平均点が九六・〇七元 れたい がん とお これんせい ぜんかもく へいたてん ひました。米沢 中 学校時代の優秀な成績は伝説的です。我妻榮は興 譲 小 学校を卒業すると米沢 中 学校に進我を認めていません。

田吉馬をサブリーダーとして、 ない一週間の小旅行も計画しています。 三名が合格し、 の時に榮をリーダー、後で米沢市議会議長を務めた本とき、からないできます。ことには 先輩や郷土の有識者から、進学率が低下し、またばい。まきうと、ゆうしきしゃ 士気が衰えたとか、藩学精神が遠のいたという批判にしょうない。 員会を作り熟議を重ねました。翌年には第一派が うく じゅくぎ かき 現東京大学教養学部)に首席合格の我妻榮を筆頭にげんとうきょうだいがくきょうようがく ぶ しゅせきごうかく わがつまぎかえ ひっとう 榮と本田は、 友人との深い付き合いもありました。当時、 て、生徒の中から校風刷新が叫ばれました。 東京大学には八名が入学しています。とうきょうだいがく はちめい にゅうがく 五年生の夏休みに親にお金の心配をかけずればいない。 風紀刷新宣言文起草委 だいいちこうとうがっこう 米沢 人 の 高等学校 在でいきょう 五年生に



声会と名付けた同 級 会は頻繁に開かれました。

晩年には同級生の親密さが濃くなり、浜田広介が雨ばなれ、 とうきゅうせい しんそう



# 三 四枚の絵はがき (兄妹愛)



にじみ出ています。
ていたのか、その愛情の深さが葉書のあて名書きと文面につな気がします。榮が十三歳年下の妹をどれだけ可愛がっつな気がします。榮が十三歳年下の妹をどれだけ可愛がっこの四枚の葉書を読んで、改めてその理由が理解できるよと言も話したことがありませんでした。

い出の為に自分の心に鍵をかけて語ろうとしなかったので性から千枝子の若い頃の思い出を書いた手紙が届きました。世界を振いて組中の人気者で、男のように行動力があり、それには「小学校を一番で卒業した千枝子さんは、女学校で大根を抜いて組中の人気者で、男のように行動力があり、それました「千枝子のおい頃の思い出を書いた手紙が届きました。世界を抜いて組中の人気者で、男のように行動力があり、それましたが、学は心から可愛がっていたからでしょう、母親にいいました。「千枝子のんはとても頭が良かったのよ」と話しての妹を学は心から可愛がっていたからでしょう、母親できた。 ない を学は心から可愛がっていたからでしょう、母親できた。 ない を学は心から可愛がっていたからでしょう、母親にはいいには、「千枝ちゃんはとても頭が良かったのよ」と話して、というとと、「千枝ちゃんはとても頭が良かったので、大きできない。 はない というとしなかったので、そので、そので、そので、またが、ころ、おは、またが、ころ、おいて、またが、きがようにある。

しょう。



### 四 立法の指導者としてりつぼう しどうしゃ

準備にも加わり指導的な立場にもありました。 我妻榮は民法の研究を一生の仕事としましたが、ホホッラールデッル ト コーヒート いっしょう

会の起草委員の間では、新憲法の基本的人権の尊重、からいるというできます。 起草委員会が設けられました。貴族院議員の我妻榮と中川からいいんかい、もう 制審議会が設けられ、さらに民法改正のための小委員会・ 家庭における男女 平 等の原則から、、旧民法の家の制度をかてい、 \*\*\*\*うみんぽう いえーせいど て指導的活動をしていました。当時、 昭和二十一年七月憲法改正に伴う法制改正のため司法法しょうか 国会においても、 「家の制度の継続」という考えが根強く 司法省民事局や委員 特を

政府の方針であれば、

委員会の考えに反するので、

族その他、

ありました。

両先生は、

木村法務大臣に面会し「戸主、



こようかに、これにはいいないこれに年施行されました。

できたのです。

「いっというでは、たったのです。

「いっというでは、たったのでは、たったのでは、たったのです。

「いっというでは、たったのでは、た

の指導に負うところが多く、こういう例は数多くあります。では、ないのでは、では、とうで、ないのでは、ないで、そばいかで、そばいかが、などで、などで、などで、ないのでは、などで、などで、ないのでは、などで、などで、ないのでは、などで、などで、ないのでは、は、法務省の初代の特別顧問に就任し、民法関三十一年には、法務省の初代の特別顧問に就任し、民法関三十一年には、法務省の初代の特別顧問に就任し、民法関三十一年には、法務省の初代の特別顧問に就任し、民法関三十一年には、法務省の初代の特別顧問に就任し、民法関



## 五民法のバイブル

結論であったことから、学界や裁判実務に重大な影響を与え続けっるん 末広の三先生から学び、民法の全分野をまとめたものが『民法講すざら きんせんせい まな みんぽう ぜんぶんゃ 我妻榮が、民法の幅広い分野を東京大学法学部で鳩山・穂積却がつまるかな、 みんぽう はばひろ ぶんや しょうきょうだいがくほうがく ぶ はとやま ほづみ 我妻民法として長年にわたって認められています。 

います。書斎には、『民法講義』の背表紙に改訂用と書かれたもいます。書斎には、『民法講義』の背表紙に改訂用と書かれたも のが必ずありました。 **榮は、研究の成果を踏まえて『民法講義』の内容を改訂して** 

先生の本を見ると必ず書いてある、大した先生です」と言ったこ 実によくバランスのとれた本と言っていいでしょう。 とがありました。考えられるあらゆる問題にこの本は触れており、 ある著名な裁判官が、「ある事柄で分からない点があって、我妻がいます。

されるのがその理由ですが、『民法講義』は今でもよく売れていて、 ばったりと止まるのが普通です。学問が進歩し、新しい判例が出ばったりと止まるのが普通です。学問が進歩し、新しい判例が出

法律学者の著書は、その学者が亡くなられた後は売れ行きがいかがらいできない。



とから しゃかいがく けんぎいがく かんしん 民法のバイブルとも言われています。 かんぽう

法の歴史に残る名論文とされています。 発達に伴う私法の変遷 」というテーマを一生の研究テーマとしばった。 ともな しょう (人がん) 的な役割を中心として研究するという考えから、「資本主義のできょう?から、「資本主義のできょう?からいん て選びました。「近代法における債権の優越的地位」は日本の民 

譲 小 学校に残されています。 す」と述べ、側のメモ用紙に書かれたのは、(一を守り、二なく、 うにまとめ上げることが一生の願いです。最高裁判所の長官は の強い信念を示す言葉として「守一(無二)無三」の色紙は興い。 の仕事を完成するということで国に尽くしたいと考えておりま 本当に重要な仕事です。私も国を愛することにかけては、決している。 本の民法の体系を、国民の宝物として、誰にでも納得できるよ 三なし)という言葉でした。まっすぐに一筋の道を歩まれた先生 て人に負けないと信じているけれども、我妻は一民法学者として、 「民法の研究を続けて行くことが、自分の国に尽くす道です。」

「教徒が、けんきょう つづ 最高裁判所長官の候補にのぼった時の話です。地元米沢できょうではいますがある。





## 六数郷への想い

文庫」を設立され、その後も続けて図書を贈っています。 その興 譲 小学校に二度ピアノを贈り、昭和四十四年に「まがきー ドラ゚ビッラ゚ドラ゙ッ゚ニラ ドービッビ を愛し、親を大切にし、恩師を敬う心篤い人でした。 昭和四十一年に多くの財産を寄附して「自頼 奨 学財団」を米沢興にきかった。 ないま かいじん きょう じんじょうがくぎじん よんぎもし 興 譲 小 学校は、榮の母校であり、母のつるが勤めた学校です。こうじょうしょうがっこう 我妻 榮 は生涯にわたって、心の故郷として、郷 里の自然と人々ホッロットッッ゚ッ゚゚ 。 ドラット゚ 。 ドーデット゚ 。 ドード 。 ドード 。 ドード 。 ドードド 。 ドード 。 ドードド 。 ドードド 。 ドードド 。 ドードド 。 ドードド 。 ドードド

逆立ち、当時の忍者キャラクターのヘヤースタイルに似ていること。 子であることから「自雷子」と呼ばれました。懐かしさを込めて 込めて「自雷さま」と呼ばれていました。 榮も 中 学の時はその息 譲館高校に創立し母校に学ぶ生徒に奨学資金を贈りました。じょうかんこうこう そうりつ ぼこう まな せいと しょうがくしきん おく ちを込めて、 から児雷也というあだ名でしたが、生徒・保護者から信頼と尊敬をから児雷也というあだる。 に油をつけませんでしたので午後になると頭髪はいつもボウボウと | 自頼 | という字をあてられ、他人に頼らず自立心が必要との気持 財団の名称について微笑ましい話があります。父又次郎は頭髪ざだだ。 かいょう しょう しょうしょ 名付けました。

米沢児童文化協会にも寄付をしています。米沢児童文化協会はよればわじょうぶんか きょうかい



学生の優れた文化的な活動で表彰しています。ができょうできょうできょう これを記念し我妻 榮 児童文化賞を設け、平成六年から市内 小 中これを記念し我妻 ※児童文化賞を設け、平成六年から市内 小 中でにようない

米沢から講演などを頼まれると、できる限り来られました。次は、よながりできない。

違うように、性格も能力も違っている。全ての人がその人でなけれた。 米澤新聞に昭和四十年元旦に寄稿された文です。 た。平成四年に開館した我妻 榮 記念館には、直筆原稿などの貴 重た。 くいせい ねん かいかん しゅがつまざかえき ねんかん じょしつげんこう もよい。ばかになって努力する何事かを持ちたいものである。」 層ができる。そしてその上に長続きするどっしりとした高いトップ ば出来ないことを身に付けておれば、それが積り積って社会の厚いです。 付けるまで、ばかになって努力することである。人はそれぞれ顔が ろ!と言えること、あいつにはかなわない!と言わせることを身に 努力する。何でもよい。どんな小さなことでもよい。おれにまかせ てはだめだ。出世や成功の早道を考えてはだめだ。ばかになって なければできないことを身につけることである。人の真似ばかりし レベルの国が築き上げられる。長い一生の間の若い一時期だけで 我妻榮 は昭和四十八年十月二十一日に七十六歳で逝去されましたができるから しょう や -社会に生活する全ての人は、その地位にあって、何かその人でしょう。 まか

な遺品が数多く展示されています。



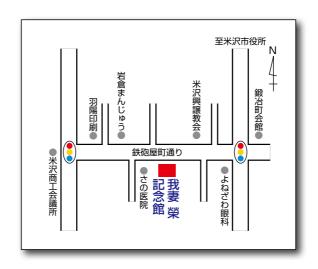
我妻榮児童文化賞表彰式

#### 我妻榮先生 略年譜

明治30年	0歳	4月1日 米沢市鉄砲屋町で父又次郎母つるの長男			
(1897年)		として誕生 (2姉2妹)			
明治36年	6歳	興讓小学校入学			
明治42年	12歳	県立米沢中学校入学			
大正 3年	17歳	第一高等学校一部丙類入学(首席合格)			
大正 6年	20歳	東京帝国大学法科大学独法科入学 米沢大火			
大正 8年	22歳	高等文官試験行政科合格			
大正 9年	23歳	東京帝国大学法学部法津学科卒業 特選給費生			
大正10年	24歳	東京帝国大学助手			
大正11年	25歳	東京帝国大学助教授			
大正12年	26歳	文部省留学生として民法研究のため欧米留学			
大正15年	29歳	鈴木緑と結婚			
昭和 2年	30歳	東京帝国大学教授 長男洋誕生			
昭和 5年	33歳	左足首の関節炎を患いギブス着用 二男堯誕生			
昭和20年	48歳	(終戦) 東京帝国大学法学部長 農地審議会委員			
昭和21年	49歳	司法法制審議会委員 貴族院議員			
昭和23年	51歳	日本私法学会理事長			
昭和24年	52歳	日本学術会議副議長 日本学士院会員			
昭和29年	57歳	法制審議会民法部会会長			
昭和31年	59歳	法務省特別顧問			
昭和32年	60歳	東京大学を停年退官 東京大学名誉教授			
昭和33年	61歳	憲法問題研究会設立			
昭和36年	64歳	法学博士			
昭和37年	65歳	臨時司法制度調査会会長			
昭和39年	67歳	文化勲章受章 米沢市名誉市民			
昭和41年	69歳	米沢興譲館高校に「自頼奨学財団」を設立			
昭和44年	72歳	興譲小学校に「まがき文庫」を設立			
昭和48年 (1973年)	76歳	10月21日逝去 勲一等旭日大綬章授与			

#### 主な著書

「民法講義 I ~V4」「民法大意上中下」「民法 I ~Ⅲ」「民法案内 I ~Ⅺ」「近代法における債権の優越的地位」「判例コンメンタール I ~Ⅷ」「民法研究 I ~Ⅺ」「民法判例評釈 I ~Ⅲ」「法学概論」



〒992-0045 米沢市中央3-4-38 TEL·FAX 0238-24-2211 http://www9.ocn.ne.jp/~wsakae





先生愛用の補聴器つきメガネ